

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 330



1999 MAY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

平成11年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会平成11年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、添付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。) 5月20日までに必着するようお願いいたします。

3. 議事

- (1) 議案第1号 平成10年度事業報告について
- (2) 議案第2号 平成10年度収支決算について
- (3) 議案第3号 平成11年度事業計画について
- (4) 議案第4号 平成11年度収支予算について
- (5) 議案第5号 役員の改選について

4. その他

記

1. 日時 平成11年5月29日(土)午後1時～2時
2. 場所 東京都豊島区東池袋4-7-7
かんぽヘルスプラザ東京
☎ 03-5952-6881
JR池袋駅東口から徒歩8分
地下鉄有楽町線東池袋から徒歩2分

表紙写真

イエティ存在説は、ヒマラヤの広い地域に分布しているが、その中でも特にネパール、ダウラギリ山群からもたらされることが多い。今回の連載執筆者の高橋好輝氏の搜索もこの山群に的を絞って行われた。

(写真はダウラギリIV 1972年群馬県ヒマラヤ登山隊撮影)

ヒマラヤ No.330

1. PEOPLE Mr. Zhang Jiangyuan
2. イエティの存在を追う 1994年イエティ搜索隊 高橋好輝
12. パキスタン物価リスト
13. 1999年パキスタン登山隊計画一覧表
15. 1999年ネパール(春期)登山隊計画一覧/中国領ヒマラヤ日本隊登山計画
16. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・Books〉
18. 2000年H A J サマー・キャンプ隊員募集
19. 中国高峰登山15年小史(21)西藏その7
24. 寸感・事務局日誌

PEOPLE

H A J主催の「中国登山研究会」も本年で7回となった。第1回と2回は、1983年夏、中国登山協会副主席（当時）史占春団長以下8名の代表团（新疆登山協会2名、四川省登山協会2名、チベット登山協会1名を含む）を迎えて東京と札幌で開催された。第3回は、86年春、四川省登山協会代表团（中国登山協会1名を含む）を迎えて東京で開催。第4回は同年暮れ、チベット登山協会代表团を迎えて東京で開催した。その後、10年ほど途絶えていたが、97年冬から再開。本年は、中国登山協会交流部の張江援部長を団長とする3名を迎えて東京で開催した。

団長の張江援さんは、1953年春天津で生まれたが、父親が鉄道関係に勤務していた関係ですぐに北京に移った。5歳の時、10ヶ月ほど内モンゴルの包頭で過ごし、58年から5年間西安で育った。

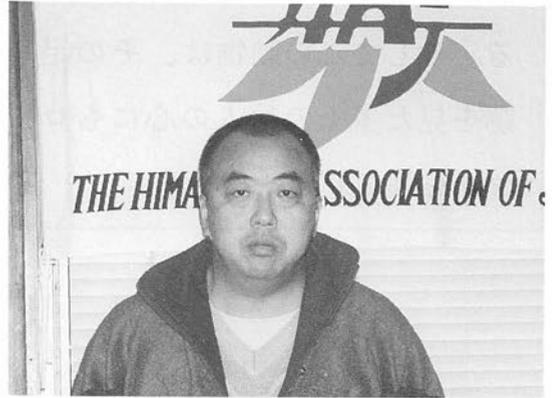
小学3年生の時に鄭州に移り、69年12月になって新疆で解放軍に入隊。72年新疆から南京に行き労働大学の一つである「南京気象学院」に入った。74年11月、北京で登山訓練を受け、翌年のチョモランマの科学調査分隊に気象担当として参加し、ノース・コルに11日間滞在した。76年、解放軍から登山協会に配属された。

H A Jと四川省登山協会が、86年夏に「シュエバオ・ディン（5,588m）で合同登山を行った時、北京から応援隊員として参加した。この時、初めてヒマラヤの頂に登頂し、また、初めて酸素を吸うという経験もした。90年にはイランの最高峰ダマーヴァンドにも登頂した。

張江援さんは、登山に関する調査に従事し、多くの登山隊に連絡官として随行した。その豊富な経験は後記の通りである。看護婦をしている奥様とは成都の八一登山隊で知り合って結婚。17歳になる息子さんがいる。

■主な経歴

- 76年 解放軍から登山協会へ。
- 77年 トムール（7,435m）
- 78年 イラン合同チョモランマ



- 79年 中国新聞社で撮影研修（主に16m/m）
- 81年 青海省トレッキング調査
- 82年 ナムチャ・バルワ調査
日中合同登山研修（ボゴダ）
- 83年 ナムチャ・バルワ試登
- 84年 同上／チャー・オユー偵察
- 85年 同上／カモシカ同人冬季チョモランマ
- 86年 日中合同登山研修（チャンツェ）
H A J・四川省シュエバオ・ディン登頂
- 87年 カモシカ同人チャー・オユー／大雪支援隊
三国合同チョモランマ空撮
- 88年 三国合同チョモランマ／京大西コンロン
北京人工岩場コーチ
- 90年 京大シシャパンマ／ダマーヴァンド登頂
日中合同ナムチャ・バルワ偵察
- 91年 日中合同ナムチャ・バルワ
- 92年 同上／ルンボ・カンリ、ジーロン調査
チョモランマ環境保護活動
- 94年 NHKチャンタン高原撮影
- 95年 J A C マカルー
- 96年 日中合同チョモラーリ隊長
- 97年 長野県チズ峰他
- 98年 J A C ガンカー・プンスム偵察
チョモラーリ、ヤートン調査

張江援（チャン・ジャンユアン）

1953年4月9日生まれ（45歳）

中国登山協会副秘書長・交流部部长

雪の住処 ヒマラヤの高峰の雪面に足跡を残した謎の動物がいる。そしてこの動物は、その足跡を見た多くの岳人の心にもロマンを刻んでしまった。

イエティの 存在を追う (I)

1994年 イエティ捜索隊
高橋 好輝

登山の世界では、ヒマラヤにめぼしい未踏峰はなくなり、バリエーション・ルートからの登攀も一段落しつつある。ヒマラヤ登山は、この先どの方向に進むのであろうか？ 他人事ながら気になる。

そんなヒマラヤにおいて依然として結着のつかない事がある。[イエティ（雪男）の謎]である。足跡の発見は云うに及ばず、それらしい獣の目撃など、状況証拠はいくらでもあるにもかかわらず未だ何一つ解明されていない。

もともと実在しないからだ！と云ってはミもフタもない。確かに各自が勝手にイメージする通りの忌まわしき雪男は存在しないかも知れない。しかし、事はそう単純ではないのである。目撃情報の中には、形態的に理解できない獣との遭遇など、誤認視や錯覚としては説明できない事例も多くある。

同様に明快な結論が得られぬものとして、人間によく似た足跡が発見される。これがイエティの足跡なのか否かはともかく、少なくともランゲル猿やヒマラヤ熊の足跡とは異なったものである。このような足跡を残す獣が存在する現実と、偶然に目撃された正体不明の動物は無関係とは思われぬ。おそらくこの組み合わせが、イエティの実態となるのであろう。それがどのようなものであれ、ヒマラヤに実存する動物であることになる。

いずれにしろ机上の推理では、これ以上何も実証できない。次は現場に行って直接調べてみることだ。

1994年、我々イエティ捜索隊は、多くの方々のご協力を得てネパールのダウラ・ヒマール、コーナボン・コーラへと向かった。

結果としては、納得できる成果を残せずに終わった。これは何事もなかったと言う事ではない。それどころか新たな宿題を背負って帰路についたのである。どうやら、やっかいな事に関わりあってしまったようだ。

私個人としては、3度目のコーナボン・コーラである。そして3度とも正体不明の足跡と出会うこととなった。人間の子供の足跡にそっくりである。これをどう考えたらよいのであろうか？ 以下は、私がイエティに関心をもって以来まとめたものと、94年捜索隊における私の体験とその考察です。

私は、調査、観察の分野に関して専門的な知識はありません。そのためレポートとしては、非学術的な面も多々あることをご理解の上で御一読下されれば幸いです。

1. 情報の分析とイエティ像

イエティとはどのような動物であるかはすでに1954年、英国・デイリー・メール雪男探検隊が「大型のズーティといわれるものはチベット産の赤熊であり、小型種のミティは猿あるいは類人猿」と推測している。

この仮説は、それまでの目撃談と、現地語で家畜を意味する“DHU”、すなわちズーティは家畜を襲う獣、“MIH”は人間を意味しているところから判断したものとを組み合わせる結果たてられたものであった。これは具体的な裏付けは弱いものながら、それなりに現実的な方向性を持った仮説ではあった。

しかし、この仮説に“足跡”からの推測が加わる。特に1951年、エリック・シプトンがメンルン氷河で撮った足跡の写真があまりにも鮮明であったため、仮説は大きく飛躍した。たった1枚の写真であったが、そこに写されていた足跡は、確かに類人猿と人間との中間型であり、巨大なものもあった。そこから浮かぶイエティ像は、ミッシ

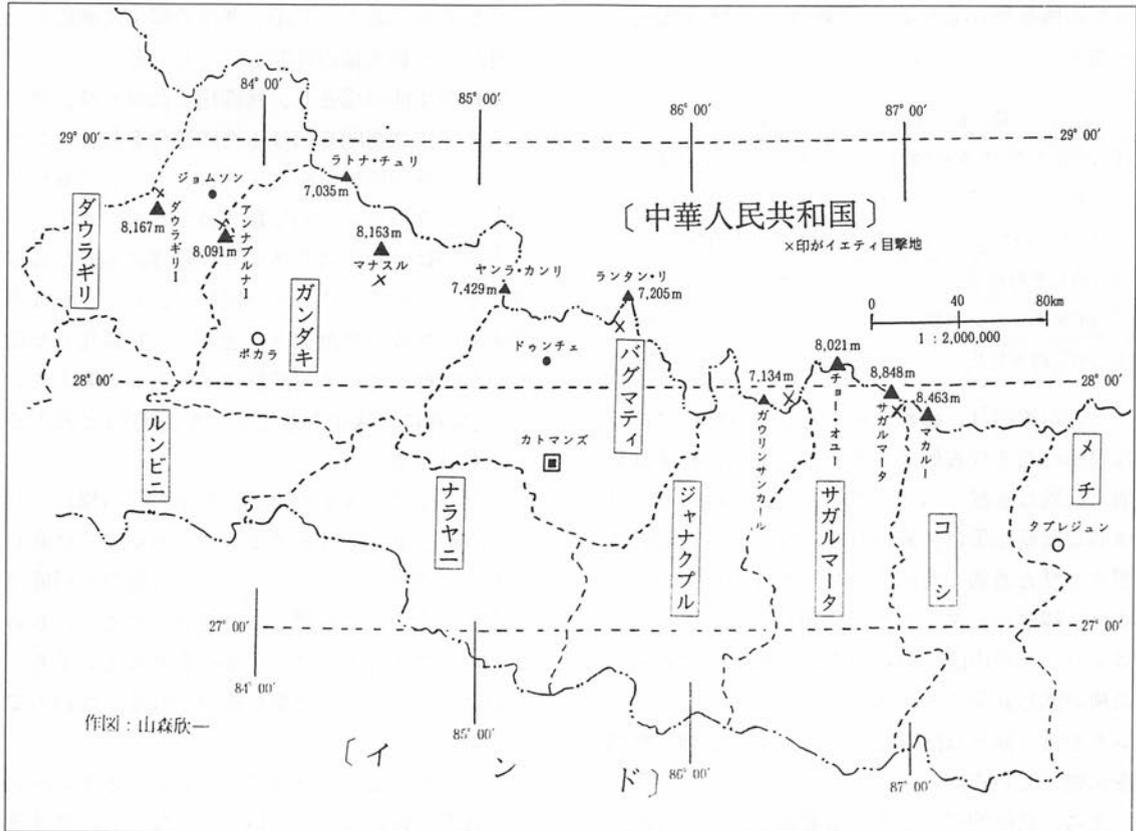
ング・リング説的な生物となり、さらに目撃情報と足跡を組み合わせると、高山帯に棲む、直立2足歩行の巨大で得体の知れぬ類人動物ということになる。このシプトンの写真が、問題の解決を難しくしている面を持っていることは否めない。

ミッシング・リング説や、ギガント・ピテクス説であることに期待を持ちながらも、実際にイエティを探す場合、実態はより現実的な獣と考えたほうが良いだろう。ことによると新種の獣である可能性もあるが、現存する種の亜種と考えたほうが妥当であろう。

2. イエティ像

デイリー・メール隊の当時と比べ、現在はイエティ情報も、より具体的なデータが加わりまた、霊長類研究の成果は側面から問題解決のヒントを与えてくれる。それらはまだ断片的で、ジグソーパズルのコマがほんの少しずつ集まってき始めた状態である。

イエティ像を組み立てるにはあまりにも資料が



不足で、正確な姿を作りあげることは不可能であることを承知のうえで、あえてイメージしてみたい。

しかし、その前にまず、熊をイエティに誤認視していないかをはっきりさせておく必要がある。

誤認の発生する原因としては、遠距離からの目撃や、視界不良の状況下における視覚的な条件で起こることはありうる。また、一瞬の遭遇でも同じようなことは起こりうる。

多くのイエティ目撃例の中には、このように熊を見誤った情報も数多くあるに違いない。また、反対に得体の知れぬ獣を見て、熊と決めてしまうこともあろう。いずれにしろ、このような不確実な情報はこの際、除外しておきたい。

熊とは異なる獣が存在する確かな証明は、目撃例の中でも確度の高い観察をしたと思われるいくつかの記録にうかがえる。

これらの目撃例は、いずれも目撃時間が長く、精神的にも余裕をもって観察できたと思われるもの、または一瞬ではあるが、近距離から明確に見たり、その獣の具体的な行動を確認しているいくつかの例を挙げてみる。(詳細は「目撃情報例」を参照)

	年	発見者	場所
①	1925	A.N.トム・バズディ	シッキム・ゼム溪谷 4500m
②	1942	スラヴォミール・ウイツ	シッキムとブータン国境
③	1970	ドン・ウィーランス(英国隊)	アンナプルナ内院
④	1971	芳野満彦	ダウラギリIV峰 5100m
⑤	1975	ポーランド隊	ローツェBC 4400m
⑥	1975	鈴木紀夫	ダウラギリIV峰 4200m

上記目撃例は、観察データとして具体的であり、臨場感のある代表例であるが、結果的にいずれも熊とは異なる獣と判断している。この他にも、具体的な観察結果は公表されていないが、人間を連想する獣と遭遇した例は、かなりの数にあがる。また、観察データとしては問題があるものの、現地ネパールや中国、旧ソ連の山岳地帯におけるこの種の話は非常に多くある。その全体的なイメージもやはり熊とは区別したものであり、類人動物を示唆している。

次に、具体的に熊と異なる要素をあげてみたい。

1. 腕が非常に長く、膝まで届く。
2. 毛の色合いが赤茶～灰色であり、黒色のヒマラヤ熊とは異なる。

(ヒマラヤ熊の中にも茶形の固体がいるようだが、数は少ない。チベット産の赤熊はネパール側ではほとんど棲息していない。)

3. 鈴木氏観察の(2頭の幼獣を含む)5頭の群れ、この群れの構成が熊の生態としては疑問である。幼獣の毛色が白色であること(霊長類にはある)、ジャンプをした時の動作は猿であり、熊とは異なる。

もちろん、これだけのデータで“熊説”を完全に否定できるわけではないが、少なくとも我々が通常知っている種類の熊とはだいぶ違っているものである。これまでの目撃者がそろって同じ結果の出る誤認視を起こしたとは考えられないし、また、全員が嘘の報告をしたとはなおのこと考えられぬことである。情報を素直に判断した場合、やはり、既知の猿でも熊でもない類人的な獣が存在していると考えなければならない。

結局“イエティ”とは、どのような獣か、おそらく類人猿である。高所、寒冷の環境に適応し、特殊化した類人猿の仲間と考えている。

密林を生活の場とし、特殊化したゴリラ、サバンナまで生活空間を広げる適応進化をしたチンパンジー、熱帯雨林の樹上生活に適応し、特殊化したオランウータン、同じ類人猿であっても生息環境の違いは、食生活も体型も行動様式も異なる特殊化をしている。これらと同様に、ヒマラヤなど、高所寒冷地の自然選択圧に適応し、特殊化した類人猿が生存している可能性は十分あると考えている。(反対に特殊化と進化をせず、原形と考えることもできる)

ヒトを連想する姿や直立2足歩行の目撃は“ヒトとは直立2足歩行をするサルである論”に通じ、猿人(アウストラロピテクス)的な発想も可能であるが、そこまで飛躍した仮説を立てることもあるまい。たとえ現実に2足歩行をすとしても、その他の面でヒト的要素は確認されていないのである。

もっとも、最近の学説では、ゴリラとチンパンジーは亜人類となるらしい。そうなると、ゴリラ

より直立2足歩行の度合いが高いと思われるイエティの立場はどうなるのか。

今、我々はそれを追求するつもりはない。この仮説はイエティを探しだし、撮影をするための手段としての推理である。

3. 目撃情報からの類人猿的特徴

古くは1925年にA. N. トム・バズィがシッキムで観察した例。2~300ヤード下手の谷で、人間に似た2足歩行の動物が灌木を引き抜く動作をしているところを目撃している。その他にも石を持ち上げたり、灌木を引き抜く獣の報告がある。主に登山者やシェルパの観察例であるが、残念なことに詳しい様子や直接の目撃者名はわからない。しかしこのような行動をする習性はあると考えてよかろう。また、1972年9月、ダウラギリIV峰をカベ・コーラ・ルートより登山活動中の日本岩登協隊は、C2(5,700m)で就寝中、ウォーという、ものすごい声を聞く。翌朝、足跡を確認した。(同時期、同じくカベ・コーラより、プタ・ヒウンチュリをめざした、名古屋YMCA隊のシェルパがイエティらしき獣を目撃している。)

このように石を持ち上げたり、灌木を引き抜く等の習性は、ゴリラのディスプレイ(誇示行動)に共通しているのではないか。同様に、咆哮音もゴリラのシルバーバックが侵入者に対し発する威嚇音に似ている。このシルバーバックが発する雷鳴のような吠え声は、ゴリラ研究者をしてこの世の中でもっとも恐ろしい声と言わせる迫力がある。いずれにしろ、5,700mの高所で就寝中、大きな咆哮音を聞いたことは非常に珍しい。

ゴリラとの共通性に限ったものではなく、野性動物一般の現象かもしれないが、1952年11月4日、第2次スイス・エベレスト隊のC5/23,000フィートにおける、ノルマン・ディレンフルトの報告でも「夜中、テントの回りを歩き回る、荒々しい鼻息とジャコウに似た臭気がテント内まで充満していた。」とある。似たような例がゴリラにもある。見慣れぬ侵入者に対して威嚇の攻撃に出た時、興奮したシルバーバックだけが出す汗の匂い(腋の下に分布するアポクリン線から発する汗と石鹸の入り混じったような刺激的な香り)である。

イエティの音声に関しては、中国(中国では野人の)の古文献に多くある。その声は鳥声に似ていたり、1000年後の現在においても房県で目撃された野人の声は、カササギに似ているとある。中国の野人情報は非常に多く、声に関しても同様である。数種類の音声記録されているが、最もしばしば表現されているものは、グワッ、グワッというものである。

中国古文献……………鳥声

中国現代……………カササギ及びグワッ グワッ、

コッ コッ

カモシカ同人隊……クワッ クワッ

鈴木紀夫隊……………カモメのような声

これらは鳥声的な共通性があるようだが、ゴリラの音声では、フート音にあたるものではないかと推測される。

ここに注目される報告がある。1974年、第2次雪男調査隊でコーナボン・コーラに入った尾崎啓一氏は、登山隊BC/3,450m直下の森の中から聞こえる、人間の赤ん坊とそっくりのオギャァ、オギャァという泣き声を聞いているのである。この音声は、ゴリラ研究者フォッシーの分類した計15種類のゴリラの音声にも含まれている。シルバーバック以外のゴリラが発する声であるが、まさに人間の赤ん坊がかんしゃくを起こした時に出すような泣き声が記録されている。そして、これは咳のように息を断続的に発するパント音、鼻にかかったぐずり声、笑い声とともに発生頻度の高い音声である。

尾崎氏はコーナボン・コーラにおいて計3回、イエティらしき姿を目撃している、残念ながら視界状態の悪さのため、8mm映像も不鮮明で、獣の正体を確認するにはいたらなかった。だが、35mmカメラで撮った写真の中の1枚に、1頭だけが他の2頭に比べて倍近い大きさの固体が写っていた。オス・メスのサイズに差があるとしても、これほど大差がある動物は限定される。性的2型の代表的なものとしては、オランウータン、及びゴリラである。

●目撃時間的には最も長時間の観察と思われる1942年5月のS・ラウィッツ他4人の例。

この目撃時におけるラウィッツたちのおかれた

立場は、異常な状況であったことを念頭に置く必要がある。このことを差し引いても、実に具体的な観察をしている。これは、視界良好であったことと、2時間も長時間、同じ場所で見ていたためであろう。そして何よりもこの情報の良いところは、ラウィッツたちがその時点では、イエティという獣の存在を知らなかったという点である。そのために、変に先入観を加えることなく、ありのままを見ることができたのだが、その後、1950年代の雪男ブームによって、当然ラウィッツも自身の見たものに他からの情報を加えてのレポートを作成したものと思われる。多少の色づけはあるにしても、おおむね正解であるということ的前提として考えたい。

この事件での特徴的なことは、「直立2足歩行・長い腕」という点である。2時間もの間、雪の台地を2本足で歩き回る獣は、最後まで四つん這いになることはなかった。大猿とも熊ともはっきり違うというその獣を、どのように理解すればよいのだろうか。「手が長い」という特徴は類人猿的である。手、腕が長い点はイエティ目撃者の多くが共通して指摘しており、特徴のひとつとして説得力にあるものでない。

この報告書をそのまま信用すれば、熊でも猿でもない、背丈8フィートもある直立2足歩行の類人動物ということになる。その2頭の獣が雪の台地をぐるぐる歩き回る構図は、なぜそのような行動をとるのか、どのような意味のある行動なのか推測もできない。

イエティに関する情報には、このように不可解なことが非常に多い。人間であるわれわれの尺度では理解し難い行動も、その動物にとっては必ず必然性があるはずであり、ましてや未知の獣の習性を今、無理をして理論建てする必要もあるまい。

ラウィッツはその獣の毛に関して、興味ある報告をしている。全身に密生する赤みを帯びた茶色の毛と、まばらに垂れ下がる灰色の長い直毛が混ざっているというのだ。このような体毛の動物は珍しく、しいて上げるとすれば、ジャコウ牛とマンモスで、これらの体毛がこの特徴を持っていたとされている。いずれも寒冷地に生息し、またはしていた動物である点が共通しており、興味ある。

●1970年 アンナプルナ南壁（ポニントン隊）／ドン・ウィーランス

前日には人間サイズの足跡及び、一瞬ではあるが姿も目撃している。2回目は明るい月夜に、単眼望遠鏡で30分間観察している。初めは熊のようでもあるが猿にも似ていると思ったようだが、4本足で立ち、かなりのスピードで雪原を横切っていくのを見て、類人猿かそれに非常に近いものと思われたと報告している。

4足歩行であるが、その歩行形態から、熊よりも猿、さらに類人猿に近いものと判断したようである。

猿の4足歩行と類人猿のナックル・ウォーキングの形は明らかに異なっている上に、体型的にも類人猿は前足（腕）が非常に長い点を特徴としている。したがって、歩行の姿勢も猿や熊と混同することはないと思われる。それを承知の上で、類人猿と判断したのであればこの観察は注目に値する。

同時に、猿または類人猿に近い種の獣とした場合、寒冷地において夜間に行動するという習性も変わっている。類人猿が夜に行動することもあるようだが通常は昼行性である。

この例だけではなく、夕刻時から夜間にかけての活動を報告している例は多い。薄暮の頃から夜間にかけての活動が通常的なものか、または人間が存在する結果であるか、それとも昼夜に関係なくそれが元来の行動時間帯であるのかは、今のところ判断できない。その獣が雑食性であり、捕食獣としての活動であるとすれば、夜間の行動も理解できる。

このアンナプルナ内院では、その後も足跡の発見が続くが、姿を直接目撃した例はない。

●至近距離での目撃例

1971年ブレ期、コーナボン・コーラよりダウラギリIV峰を目指したGHMJ隊時における芳野隊長の例である。

グルジャ・ヒマール南東稜、C2/5,100mにて、約15mの距離で対面している。その報告によれば、背は1.4m位で、顔に毛はなく、くぼんだ丸い目、鼻は大きく広がり、口はよく見えなかった。全身は灰色の毛に覆われ、頭の毛がヒッピー

のように特に長く、肩に垂れ下がっていたのが印象的であった、とある。その間およそ30秒、じっと動かさずこちらを見つめていた。カメラを取ってくる間に、その獣は南側タレジャ・コーラに直立2本足のままで、降り始めていた。その直後、足跡を確認すると、長さ16cm、幅約12cmで、親指とひとさし指が離れており、人間の手のような形だった（四手類）と報告している。

この報告から気づくことは、くぼんだ丸い目と鼻が大きく広がっている点である。これらが類人猿の特徴に似ており、少なくとも狭鼻猿や熊ではない。また、足跡の観察が正確であったとすれば、これは明らかに猿または類人猿のものであろう。頭の毛が特に長く、肩まで垂れ下がっている点は、人間的な感じもするが、ヒヒ類、特にゲラダヒヒや類人猿ではオランウータンなども長い。もともと猿類はヒトほど首が長い訳ではない。

この他に近距離でイエティらしきものを見た例は、1975年、ローツェ登山中のポーランド隊のメンバーが、4,500m地点で、約40mの距離で目撃している。人間によく似たその動物は、両手を振って足早に去っていったと報告している。詳しいことは不明である。

1975年、再びコーナボン・コーラにおいてイエティらしき獣の目撃があった。鈴木紀夫氏は、3,700mの監視キャンプより雪渓谷を間にした対岸の斜面に、2頭の幼獣を含む5頭の群れを発見する。約150時間に及ぶ観察の結果、胸が異常に厚く、肩が盛り上がり、腕は太くてとても長い。尾はないようだ。腹は引き締まっている。その姿はゴリラそっくりである。小さな滝をジャンプで越した形は猿類のスタイルである。足は雑誌「ソボエト同盟」に出ている絵（ソ連学者チームが目撃し、後日、画家に描かしたもの）より少し短い、と報告している。

以上、イエティの正体＝類人猿の類似性を挙げてみたが、ここに挙げた例は、どれも情報源がはっきりとしたものであり、また具体的な観察ができたものである。この他にも多くの目撃例があると思われる。さらに、現地住民の情報は非常に多い。その話の中からヒントを得る価値は充分にある。なぜなら、近年高所登山が盛んになるにつれ、外

国人によるイエティらしき獣の目撃事件があいついで起こり、その結果、現地住民の話の裏付けをしているのである。結果的に現地住民も外国人も、直接その獣を目撃した人たちは、似た結論を出している。

ヒマラヤの高所寒冷の地帯に、人間を連想する姿をした、大猿か類人猿の類の獣が存在している。今ここでイエティ像の正体を仮説すれば、類人猿の可能性が最も高い。

4. ダウラ・ヒマール南面における目撃例

○=目撃 ×=足跡 △その他

I. 1971年4月 GHMJ隊 5,000m地点 ×
状況：ダウラギリIV峰のC1、4,650m地点よりC2、5,100mへの南東稜をルート工作中、高橋好輝とシェルパの4名が発見する。午前10時、天候曇り。稜の上方より、コーナボン側のランベ状雪面を下り、4人のいるコルの部分で尾根を越し、南側のタレジャ・コーラ源頭に下降していた。下降ルートは急峻なゴルジュ状となっており、その先は確認できず。また、上部は雪のランベ状部分で約50m確認する。その先の岩峰の乱立する稜線上に数か所、足跡を認めたが、その先は確認しなかった。これはできなかったのではなく、関心を払わなかったのである。登山隊は総じて登山以外のことを深く追求する余裕がなく、また、興味をもっていない場合が多いことは残念である。尾根の状況は、スノーリッジと岩峰の乱立する場所である。雪の状態は比較的締まっており、前夜、降雪がなかったこともあり、形も崩れていない。ただし、足指が確認できる程良い状態ではなかった。下降してきた足跡は、歩幅約20～25cm位であり、ずいぶんと小刻みな歩き方であった。細い雪のコルに少し上り返す部分でスリップしたあともあり、コルを登った部分で右上の雪壁部分に足跡とは別の痕跡が残っている。前日の午後、または、今朝のものと思われる。

サイズ：長さ 20cm 幅 10cm 沈み込みは浅く、体重は我々より軽いものと推測される。

II. 1971年4月 梶山山岳会隊 5,500m地点 ×
ダウラギリV峰を目指していた同隊は、GHMJ隊と同時期に活動しており、足跡を発見した。

状況：4月13日アイス・フォールを登った雪原のところで柳沢利文らが足跡を発見。翌日手塚英信らが、足跡を再確認して後を追ってみたが雪が激しくなり断念した。この足跡の写真はかなり明瞭に写っていて、信濃毎日新聞などに発表された。コーナボン・コーラのとなりツォーラボン・コーラは、ダウラギリV峰から南に派生する尾根により境界となっている。尾根の末端は、ツォーラボン・ピークとなり、ミャグディ・コーラとコーナボン・コーラの合流地ドバンの上で大岩壁となっており終わっている。直線で5～6km離れた地点で、同時期にサイズの異なる足跡が確認されたことになる。

サイズ：長さ 28cm 歩幅 105cm 約250mにわたり残されていた。

Ⅲ. 1971年5月 GHM J隊 5,100m地点 ○

状況：芳野隊長は、C 2 (5,100m) にて直立2足歩行の生物と、約15～20mの距離で遭遇する。約150cmの背丈、顔を除き全身に長い毛のある生物。頭の毛が特に長く、肩まで垂れ下がっている。4月に足跡を発見した地点は、C 2 からわずかの距離である。その方向から雪稜沿いに登ってきた後、C 2 前方の赤旗の竹竿のところで立ち止まり、その後、タレジャ・コーラ側の雪壁を下降して行く。直後に足跡を確認したが、長さ約16cm、幅12cm程度であった。この日の天候はガス及び小雪。C 2 から上部へのルート工作に松田昭、高橋。C 1 から荷上げチームもあり、目撃時間は荷上げチームがC 1 へ下降し、C 2 に芳野隊長1人となった時である。

Ⅳ. 1972年9月 名古屋YMCA隊 ○

状況：ダウラ・ヒマール西端のプタ・ヒウンチュリを目指した時、シェルパが目撃した。

Ⅴ. 1972年9月 日本岩登協会隊 ×△

状況：ダウラギリIV峰をカベ・コーラ経由での登山活動中、C 2 (5,700m) 地点で就寝中、ウォーというものすごい声。翌朝、足跡を確認する。

[ⅣとⅤは、同時期、同じカベ・コーラの中で起こったことであるが、同一個体か、別の個体かは不明。]

Ⅵ. 1973年ポスト期 イギリス隊 4,200m ○

状況：コーナボン・コーラにて、BC～C 1 へ

の荷上げ活動中、午前10時頃、数名のシェルパ及び隊員の前に現れる。シェルパはパニック状態になる。隊員のロジャーが16mmカメラで撮影したが失敗。状況としては、「腰までもぐる雪」とあるが、ポスト期としては異常である。(日時は不明) また、その後のイエティが退去した方向も不明であるが、状況からしてBC方面に下降することはありえず、南東稜を越えてタレジャ・コーラに去ったものと考えられる。

Ⅶ. 1974年3月～4月 第2次尾崎調査隊 ○

状況：3月31日 コーナボン・コーラ南東稜北東斜面約4,000m地点。約700m隔たった対岸より200m/m望遠レンズで数十秒確認する。2本足で立つ褐色のシルエット、尖り頭に遅く盛り上がった肩の獣。前進キャンプの200m下方の森の中で、オギャー、オギャーという赤ん坊そっくりの泣き声。4月6日 午後2時、ガスの晴れ間、対岸の斜面に3頭の動物を確認する。直立するもの、4足で歩行するものあり。8m/mカメラと200m/mレンズ装着の35m/mカメラで撮影する。4月10日 午後4時、第2前進キャンプ(3,700m)より700m～800m離れた3,500m地点に足跡を発見する。同日夕刻、同地点の雪面上を身軽に動く獣を目撃する。8m/mカメラにて撮影するが、光量不足と遠距離のため、獣の正体を確認するに至らず。なお、今回撮影したフィルムのうち、1カットだけ他の動物の2倍はあると思われる大きな動物が1頭写っていた。それは、ゴリラが四つんばいになっているようで、ギガントピテクスを連想したとある。

Ⅷ. 1975年7月25日 鈴木紀夫隊 ○

状況：コーナボン・コーラ BC～C 1 間。鈴木氏の云う三角岩から左に行った断崖の上、2つ滝のある右の滝の上、キャンプ地より700m先。目撃時間は17時22分より約1時間30分。5頭確認。(大型2、中型1、小型2)。ゴリラのようだ。胸が異常に厚く、肩が盛り上がり、腕は太くてとても長い。尾はないようだ。腹部は引き締まっている。背丈は、立ち上がると1m70cm前後。小型の2頭は、40cm～50cmくらい。毛の色は赤褐色。中くらいのものは、薄茶。小さいのは白い。退去ルートは、C 1 南側のピークに向かい、のちにタレジャ・

コーラ側に消えた。時期は、雨期の最盛期であり、高山性草地に花が咲いている。残雪は、谷筋にありその他はC1まで草地である。草食性の生物であれば、餌を求めて出没する可能性大。また、大型の雷鳥やナキウサギも数多く生息。

IX. 1975年9月 カモシカ同人隊 ×

状況：コーナボン・コーラ C1直下の残雪上に残された、人間では2歳くらいの足跡。9月頃が残雪が最も少なく、BC～C1間では、ほとんど雪を踏むことなく登ることも可能である。この発見は、前日の降雪による残雪のあるところにたまたま残っていたと考えるべきであろう。鈴木氏の見撃から約1ヶ月後であり、小さな足跡ということは、2頭の小型のものの足跡に違いないと判断できる。この時点では、BC～C1間の荷上げ作業の最盛期であり、隊員らが頻繁に行動しており、また、C1にも常時人間が滞在している状況下での接近である。2頭が子供でもあり、この大きさでは単独行動はしないと思われる。残雪に残った足跡は、子供のものに違いないが、近くに必ず大型の親も来ていたと推測される。(注)この時、ピッケルと比較した足跡の写真があり、そのサイズは約25cm、幼獣のものにしては大き過ぎる。これは、小さな足跡とは別のものと思われる。写真の足跡の特徴は、人間の大人と比較すると、かかとが細くつま先部分が広いことが分かる。猿、または、類人猿的な特徴である。土踏まず部分が湾曲していることから、右足と判断できる。

X. 1975年10月 カモシカ同人隊 △

状況：コーナボン内院 C5 (5,600m) 姿も足跡も確認したわけではないが、一例として以下

のようなことがあったので記しておく。コーナボン内院のC5は、C4より700mほど下降した地点の広大な氷河盆地の中にある。クレバスと氷塔の中の平らな地点に建設されている。昼過ぎキャンプ地のすぐ近くから「クワッ、クワッ」という声が出る。しかも1ヶ所からだけではなく、位置を変えた所からも聞こえてくる。これは夜までずっと続いた。キャンプにいた数人は何の声か分からないまま、この不思議な声を聞いていたが、その日ツルの渡りがあったので、ツルがこの氷河に着陸し、一晩の停滞地としているのだらうという結論を出した。あるいはカラスがキャンプ地の餌を求めてやって来たのでは、とも考えられたが、この短い鳴き声からカラスの可能性は少ない。あくる日も鳴き声は続いた。ちなみに「中国の野人」によると、中国での野人(イエティ)の声に関する報告では、野人は何種類かの発生をするが、その中でもしばしば報告されている声は、鳥のような「クワッ、クワッ」というものである。

XI. 1986年11月1日 第6次鈴木隊 ×

状況：コーナボン・コーラ 3,700m地点。南東稜の斜面を横切り、12年前、5頭の雪男が消え去ったと同じ峰に続いている。鈴木氏は、この峰が雪男の通路と確信しているようだ。状況から推測し、足跡は谷の右上方より来て、南東稜の斜面をトラバース気味に稜線上のピークを目指しているようだ。

XII. 1982年10月 カモシカ同人隊 ×?

状況：ミャグディ・コーラ ダウラギリI峰BC (4,500m) ダウラギリI峰北壁の懸垂氷河の上を、BCを見下ろすようにトラバース。

ダウラ・ヒマール以外の地域の見撃例

○=目撃 ×=足跡 △=その他

年	目撃者	場所及び高度	状況
1887	W.A.ワッテル大佐	シッキムとチベットの国境/5000m	×
1906	H.J.エルウェス	チベット	○
1915	R.O.シェント ダーズリン地区森林監督官(学会発表)	シッキム	分類学上、未知の大猿が実在。非常に高い山中に棲み、厳寒時のみバルートに現われる。全身に、長めの褐色の毛、顔は黄褐色、身長4フィート前後、主に地上性。足跡18~24インチ。
1921	C.A.ハワード・パリイ	ラクパ・ラ付近	× 2,200フィート。第1次エベレスト踏査隊

年	目撃者	場所及び高度	状況
1925	A.N.トム・バズィ	シッキム、ゼム溪谷/4,500m	○ 2~300ヤード下手の谷に人間そっくりで、2足歩行の移動を目撃、灌木を引き抜く。6~7インチの人間形の足跡。
1937	ジョン・ハント	ゼム溪谷/19000フィート	× 2匹の人間に似た足跡。(シッキム)
1937	スマイス	ギルバルバット	× ガルワール/5,180m
1942	スラヴォール・ラウィツ他4名	シッキムとブータンの国境近く	○ 100ヤードの距離。12フィート上手より約2時間に渡り目撃する。背丈約8フィートの直立して歩き回る2匹の動物。頭は四角張っており、耳は頭蓋にびったり付いているようだ。肩は撫で肩、厚ぼったく頑丈な胸と長い腕、手首は膝まで届いている。横から見ると、頭の後部はてっぺんから肩にかけて一直線をなしている。形は熊と大猿のあいの子のようだが、熊とも大猿とも違う点のはっきりしていた。毛は赤みを帯びた茶色であり、肌は密生している。それに混じって灰色に輝く長めの毛がまばらに垂れ下がっていた。
1948	アカゲー・ソールベルグ ジャン・フロステイ (ノルウェイ)	ゼム溪谷	○ 茶褐色の毛に覆われた人間に似た猿。背は中位の人間程度。長く毛深い尾あり。格闘となりフロステイが傷を受ける。(この事件は、はっきりした証拠がなく留保)
1951	エリック・シプトン	メンルン氷河	× 長さ32cm、幅16cm。現在までのところもっとも明確な足跡の写真で、指の状態もよくわかる。5,800m。
1952	Dr.エドアーズ・ウィス・デュナン 第1次スイス・エベレスト隊長	ロブジェ溪谷出合付近	× 長さ25~30cm。幅12~15cm。歩幅35cm位。一直線の進路。推定体重80~100kg。5本の指を見分けることができる。うち3本にツメ跡を確認。かかとの後ろに三角形の痕跡が2個あり(毛のふさか?)この時、計4例の別の足跡を確認する。
1952	ノーマン・ディーレンフルト	エベレスト C5/23,000フィート	△ 真夜中1時頃、テントのまわりを歩きまわる。荒々しい鼻息と「ジャコウ」に似た臭気。
不詳	ハーミッシュ・マク アイネス ジョン・カニングム	エベレスト山群	× 早朝、テントのまわりを歩きまわる足音と足跡。
1952	竹節作太 マナスル踏査隊	マナスル東尾根	○× 足跡及び姿を目撃。体長2m、黒い毛直立。300m先。数人のシェルパと目撃。
1954	デイリー・マイル探検隊	ソロクンブ	× 多数の足跡を発見する。
1955	橋本誠二	マナスル	× 3列に並んだもの(3頭)。
1958	ジェラルド・ラッセル	東部アルレ谷	○ 川でカエルを捕える獣。身長1.2m。
1969	九州大学院生	ランタン/5,200m	× 長さ50cm、幅30cm。指と思われる部分もはっきりと残る。
1970	英国、ポニントン隊	アンナプルナ内院 マチャブチャレ BC付近	○× 人間サイズの足跡。前日に一瞬姿を目撃する。また、月夜に30分間目撃。熊かも知れぬが、猿に似ていた。単眼望遠鏡で観察。その動物は4本足で立っており、かなりのスピードで雪原を横切る。類人猿かそれに非常に近いもの。
1971	谷口正彦	アンナプルナBC	× 長さ24cm、幅11.2cm。
1972	藤井正善 (岩と雪28号)	ヤンポディン/ 3,200m	× ポーターが発見。人間の大人より少し小さく目だが形は人間にそっくりのはだしの跡が道を横切っており、足指も確認できる。50mばかり足跡を追ってみた。ヤブの中をずっと2本足の足跡がつづいていた。写真を撮る。
1972	野性生物保護協会	アルン谷	× エリック・シプトンの写真とそっくりの足跡を発見し、撮影する。
1974	ポーランド隊	ローツェBC	× 長さ35cm。かかとは馬の蹄型。
1975	ポーランド隊 2.	ローツェBC	○ 40mの距離から人間に似た生物を目撃。両手を振って足早に去る。
1975	八嶋寛	アンナプルナ C1直下/5,100m	× サイズ35cm×15cm。指先は顕著でないが、2つ以上に分かれているようだ。急峻な岩場を一直線に登ってきて、また急峻な雪壁を下降している。
1986	トニー・ウールドリッジ	ネパール西部 ジョシマス付近	○ 身長約2mの直立する黒い獣を目撃し、撮影する。特徴は角張った頭、長くて筋肉質の胴、膝に達するくらい長い腕。
1987	ラインホルト・メスナー	チャー・オユー	○

年	目撃者	場所及び高度	状況
1988 5.8	フーベルト・フォルマー	ソル・クンプ	○ 身長2mの獣を撮影する。濃淡のある茶色毛、のっぺりした顔、平べったい鼻。サル又はゴリラのように見えた。2本足で立っていたのが、立ち去る時は手も付いたようである。
1990	大関保 (バルドール山)	ガネッシュ・ヒマール チリメ谷/3,650m	× 長さ約30cm、幅26.5cm、歩幅30cm、深さ5cm、約50個。岩壁基部の氷結したルンゼで消えている。
1995	野沢井歩	ロールワリン テンボー村	× 足跡の形は犬やヤギなどとは明らかに違う。猿や人間に近い形だった。大雪の後だったのでトレールをはずすと雪にかなり潜るので人間の大人より体重は軽いと思われる。

[イエティ関係資料]

(編集部作成)

1. ゴビ砂漠を越えて—ヒマラヤに住む雪男— (S.ラウウィッツ著 小野武雄訳) 鳳映社 S33,2,28
2. 雪男探検記 (レーフ・イザード著 村木潤次郎訳) ベースボル・マガジン社 S,33,3,15
3. 雪男 ヒマラヤ動物記 (林寿郎著) 毎日新聞社 S,36,6,1
4. ヒマラヤ 日本人の記録 (徳岡孝夫著) 毎日新聞社 S.39,1,15
5. 雪男をさがす (谷口正彦著) 文芸春秋社 S,46,12,10
6. 雪よ雪山よ雪男よ (尾崎啓一著) 時事通信社 S51,2,25
7. まぼろしの雪男 (谷口正彦著) 角川書店 (文庫判) 1974,8,1
8. 冬のソロ・クープ (山崎英雄/大塚博美) 「山岳第五十五年」日本山岳会 1961,3,30
9. 雪男は実在するか? (中川弘) 「山と溪谷385号」1970年10月号
10. シプトン自叙伝 未踏の山河 (エリック・シプトン著/大賀二郎・倉知敬訳) 茗溪堂 S,47,2,10
11. 幻の動物たち (下) (ジャン=ジャック・バルロワ著/ベカエール直美訳) 早川書房 S,60,11,30
12. ヒマラヤの雪男 (茂市久美子) 「岳人512号」1990年2月号

(以下は、山と溪谷300号から引用)

13. Animal Legends (著者・Burton,1955)
14. On the Track of Unknown Animals (Heuvelman 1958)
15. Lancet (1960 June 6th)
16. The Story of Everst (Murray 1954)
17. Nature (1960 August 13th)
18. Alpine Journal (Pranavanand Vol.LX I)
19. Science (Vol.CXXIII, CXXVI, CXXVII)
20. The Sherpa and Snowman (Stonor 1955)
21. The Snowman and Company (Tchernine 1961)
22. Alpin Journal (Tilman 1955 Vol.LX)
23. Manchester Guardian (Tscheresky 1954)
24. Mountain World (Wyss-Dunant 1960-61)

パキスタン物価リスト

1998年12月調査 1 US\$ = 53Rs

品名	価格Rs	品名	価格Rs	品名	価格Rs
圧力釜 (10ℓ)	625	小麦粉 (アタ) 20kg	138	オレンジジュース	120～
〃 (8ℓ)	565	小麦粉 (kg)	20	ミネラルウォーター	18
〃 (6ℓ)	500	食用油 (kg)	50～	エネルギージュース	45
鍋 (φ42cm)	650	砂糖 (kg)	19	カレー粉	10
〃 (36cm)	600	紅茶 (kg)	30～70	ケチャップ	10～
〃 (30cm)	550	粉ミルク (kg)	140	酢	20
フライパン (φ42cm)	140	塩 (kg)	8	キッコーマン醤油 1ℓ	250
ヤカン (L)	260	ダル豆 (kg)	36～	ジャム	40～
〃 (M)	190	米 (バスマティ) (kg)	20～40	ハチミツ	170～
スプーン・フォーク各々	10～	米 (日本米) (kg)	70	ママレード	40～
スープカップ	20～	チキンコンスープ 50g	40	あめ	25～50
食器洗い スポンジ	10～	野菜スープ	65		
〃 洗剤	7～	トマトスープ	38	トイレットペーパー	15～20
		ティーバッグ (100)	96	シャンプー (200ml)	60～
EPIガス	450	コーヒー 100g	625	石鹸	10～
ボタンガス		ビスケット 塩味	20～	歯磨き粉 (70g)	24～
ケロシンオイル 1ℓ	11	〃 クリーム	20～		
ケロシンストーブ 1口	600	クラッカー	20～		
〃 2口	750	ツナ缶 185g	60～	プロパンガス (ボンベ) 20ℓ	1600
ケロシン用ポリタン 20ℓ	100	コンビーフ 340g	125	ガス (中味)	230
ベトロマックスランプ	240	オイルサーディン	65	アダプター	190
ケロシンランプ	80	フルーツ缶 425g	65～		
ガスライター (使い捨て)	10	スパゲッティ 500g	25	メタ	
ローソク	5	〃 (輸入物)	60		
ドライバーセット	80	マカロニ	20～	スノーバー (1本)	
軍手	30	ヌードル	20～	フィックスロープ (1m) 新古品	¥100～120
缶切り	45	干しナッツ (kg)	20～100	〃 新品	¥150
サングラス	25～100	チーズ 340g	50～60		
ソックス	10～60	オバルティン 400g	180		
ナイロンシート	35～50	ホットチョコレート			

(提供: 日パトラベル)

(注1) 上記表は、1998年12月調査のもので、ルピーの下落や購入する店や場所によって価格の差がありますことをご了承下さい。

(注2) 鍋の価格は、通常、量り売りとなっております。1kg150Rsです。

(注3) キッチン用品に限らず、食料品も日本から持参されなくても、良いものが揃います。

(注4) プロパンガスの空ボンベは、購入した店にて1500Rsで引取ってくれます。

1999年パキスタン登山隊計画一覧表

パキスタン観光省によると、今年パキスタンの高峰に向かう登山隊は67隊で69座を目指す。相変わらずバルトロ地域への入山隊が圧倒的に多く、山別にみると、ガッシャーブルムⅡ峰へ12隊、ブロード・ピークへ11隊、トランゴ・タワー岩峰群へ9隊、ガッシャーブルムⅠ峰及びK2へ各4隊、ガッシャーブルムⅣ峰へ2隊と、全体の2/3にも当たる。他には、ナンガ・パルバットに5隊、マッシャーブルムとスパンティックに各3隊、ディランとラトックⅢ峰に各2隊が入山する。国別に見てみると、日本が12隊と圧倒的に多く、次いでスペイン7隊、ドイツとイギリスが各6隊、韓国が5隊、イタリア、フランス、アメリカそれにオーストリアが各4隊、スイスが3隊、チリが2隊、ウクライナ、チェコ、イラン、ベルギー、ノルウェー、ロシア、ポーランド、コロンビアそれにアメリカ・ロシア合同が各1隊となっている。また、パキスタン山岳会が自国の登山隊としては初めて冬期登山隊を派遣している。

山名	標高	国名	隊長名	登山期間	人数
K2	8611	G登攀クラブ	藤原拓夫	5/1～90日	5
K2	8611	韓国	Hyeng Chil Lim	5/25～90日	6
K2	8611	イタリア	Walderman Nicleviez	6/1～120日	
K2	8611	イタリア	Nanual Luggl	6/10～90日	8
ガッシャーブルムⅠ	8068	韓国	Byong Chul Lee	5/25～90日	5
ガッシャーブルムⅠ	8068	イギリス	Timothy Bird	6/3～90日	10
ガッシャーブルムⅠ	8068	ウクライナ	Savost Kov Victor	6/15～90日	15
ガッシャーブルムⅠ	8068	江北山の会	細田 一郎	7/15～60日	1
ブロード・ピーク	8047	スペイン	Pereda Lec.	5/15～90日	5
ブロード・ピーク	8047	チリ	R.F.Vivanco Figoeroa	5/25～90日	5
ブロード・ピーク	8047	スイス	Adrian Buhlmann	5/30～90日	5
ブロード・ピーク	8047	チリ	C. Galvez Sentibanse	6/5～8/30	5
ブロード・ピーク	8047	アメリカ	William F Vipond Jr.	6/5～90日	16
ブロード・ピーク	8047	チェコ	Peter Tucek	6/10～90日	8
ブロード・ピーク	8047	ドイツ	Raif Dujmovits	6/13～90日	14
ブロード・ピーク	8047	フランス	David Jonglez	6/19～90日	9
ブロード・ピーク	8047	イタリア	Joaquim Vila Castaner	6/20～90日	12
ブロード・ピーク	8047	オーストリア	Edward Koblemuller	6/21～90日	5
ブロード・ピーク	8047	イラン	Ramin Shojael Beghini	7/2～90日	6
ガッシャーブルムⅡ	8035	韓国	Jong Seung Lee	5/25～90日	5
ガッシャーブルムⅡ	8035	韓国	Lee Byung Gab	5/28～90日	5
ガッシャーブルムⅡ	8035	イギリス	David Hamilton	6/1～90日	10
ガッシャーブルムⅡ	8035	オーストリア	Ronald Maruna	6/11～90日	5
ガッシャーブルムⅡ	8035	オーストリア	Walter Zorer	6/24～90日	5
ガッシャーブルムⅡ	8035	フランス	Bouchard Pierre	6/26～90日	8
ガッシャーブルムⅡ	8035	アメリカ	Christine F. Boskoff	6/28～8/15	3
ガッシャーブルムⅡ	8035	ベルギー	Borislav Dimitrov	7/1～90日	10
ガッシャーブルムⅡ	8035	スペイン	Francisco J. Goerlich	7/1～90日	7
ガッシャーブルムⅡ	8035	スペイン	Oriol Garcia Farre	7/2～90日	6

山名	標高	国名	隊長名	登山期間	人数
ガッシャーブルムⅡ	8035	スペイン	Felix Gveipo Villar	7/2～90日	11
ガッシャーブルムⅡ	8035	フランス	Lassalle J. Francoise	7/4～8/21	10
ガッシャーブルムⅣ	7925	韓国	Oun-Bea Kim	5/30～60日	3
ガッシャーブルムⅣ	7925	アメリカ	Steve Swenson	6/12～60日	9
トランゴ・ネームレストワー	6239	アメリカ	Mark Synnott	6月	5
トランゴ・タワー	6231	イタリア	Jiri Novak	6/10～60日	10
トランゴ・タワー	6231	ノルウェー	Robert Casprson	6/10～60日	4
トランゴ・タワー	6251	スイス	Roux Federic	7/1～60日	5
トランゴ・ネームレストワー	6286	ドイツ	Thomas Tivadar	7/10～60日	5
トランゴ・タワー	6251	ロシア	Alexander Odintsov	7/15～60日	4
トランゴ・ネームレストワー	6245	スペイン	Inaki Gomez Perez	7/15～8/11	4
トランゴ・ネームレストワー	6257	オーストリア	Radner Kurt	7/21～60日	8
ナンガ・バルバット	8125	ドイツ	Peter Guggemos	5/29～90日	5
ナンガ・バルバット	8125	スペイン	Alberto Innurratgi	5/30～90日	5
トランゴ・タワー	6245	同上			
ナンガ・バルバット	8125	労山全国連盟	近藤和美	6/4～90日	6
ナンガ・バルバット	8125	福岡登高会	大石義豊	6/14～90日	19
ナンガ・バルバット	8125	コロンビア	Volker Stall Bohm	6/15～90日	5
ラトックⅢ	6949	ドイツ	Alexander Huber	6/1～60日	16
バインター・ブラック	7285	同上			
ラトックⅢ	6949	イギリス	David Muir Morton	6/22～60日	6
ラトックⅤ	6190	鉄腕山岳会	大宮 求	7/26～8/29	6
スキャン・カンリ	7544	スイス	Urs Wiget	5/24～7/7	14
マッシャー・ブルム	7821	富山	カワハタサトシ	6/9～60日	10
マッシャー・ブルム	7821	アメリカ/ロシア	Lev Loffe	7/4～60日	5
マッシャー・ブルム	7821	福岡山の会	稲永 篤	7/10～60日	4
ディラン	7266	イギリス	Mathew Hammerton	6/20～60日	4
ディラン	7266	ポーランド	Piotr Gawtowski	7/20～9/1	4
スパンティーク	7027	ドイツ	Dieter Kozlowski	6/13～60日	7
スパンティーク	7027	フランス	Bouisson Marc	6/28～60日	3
スパンティーク	7027	バーバリアン	野沢井 歩	7/15～60日	6
プマリ・チッシュ	7492	イギリス	Scott F. Muir	6/1～60日	8
キンヤン・キッシュ	7852	同人パハール	飛田 和夫	6/4～60日	4
モムヒル・サル	7343	めっこ山岳会	武田澄人	7/15～60日	5
サンゲマル・マール	7050	イギリス	Allan Pilkington	7/16～60日	5
サカル・サール	6272		宮沢 章	7/20～60日	6
ムチェ・チッシュ	7543	スペイン	Luis Migual Lopez	6/15～60日	5
シスパーレ	7611	ドイツ	Max Wallner	6/15～60日	10
コズ・サール	6677	仙台一高	ヤマガタイチロウ	7/11～60日	6
ビル・ピーク	6363	パキスタン山岳会	Mohamma Masir Awan	2/20～60日	9

※数字その他は観光省発表に準じる

1999年ネパール(春期)登山隊計画一覧表

1999年3月8日現在

No.	山名	標高	ルート	国名	隊長名	隊員数
1.	アマ・ダブラム	6,812	South West Ridge	スイス	Phantel Bleri	4
2.	アンナプルナ I	8,091	North Face	スペイン	Ferran Garcia I CREIX	9+9
3.	アンナプルナ I	8,091	North Face	スペイン	Juan Olarzabel Uneage	7
4.	ダウラギリ I	8,167	North East Ridge	スイス	Martin Flasher	4
5.	ガンガプルナ	7,455	South Face~East.R.	アメリカ	Mark E. Scott Nash	8
6.	マカルー I	8,463	North West Ridge	オースリア	Matlhw John Roife	10
7.	マナスル	8,163	North East Face	カナダ	Andrew Mckinlay	7
8.	プモ・リ	7,161	South East Ridge	アメリカ	David Netille	4
9.	サガルマータ	8,848	South East Ridge	アメリカ	Peter George Athans	5
10.	サガルマータ	8,848	South East Ridge	イギリス	Jonathan Tinker	9
11.	サガルマータ	8,848	South East Ridge	スウェーデン	Goran Kropp	5
12.	サガルマータ	8,848	South East Ridge	ネパール	Arbin Timilsina	1
13.	サガルマータ	8,848	South East Ridge	スウェーデン	Tina Siogren	2
14.	サイバル東峰	6,882	West Wall Ridge	オーストリア	Roland Mattie	2
15.	タムセルク	6,623	North East Ridge	スペイン	Carles V.Ocana	2
16.	ローツェ	8,516	West Wall	ガイア・A. C.	小西 浩文	2

1999年中国領ヒマラヤ日本隊登山計画一覧表

No.	山名	標高		派遣母体名	隊長名	人数	備考
1.	チョモランマ	8,848	北 稜	イタリア	S.マルティニーニ	1	春 石川富康 (62)
2.	〃	〃	〃	国際隊	R.ブライス	2	春 小塚和彦/小林邦次
3.	ガッシャーブルム II	8,035	北東稜	立教大学	牛窪 光政	12	夏
4.	シシャパンマ	8,027	北東稜	群馬県山岳連盟	名塚 秀二	6	秋
5.	〃	〃	〃	日本山岳会・東海			秋
6.	〃	〃	〃	マウンテンゴリラ			夏
7.	ナムナニ	7,694	北カンテ	日本ヒマラヤ協会	山森 欣一	6	秋
8.	ムスターグ・アタ	7,546	西 稜	御殿場山岳会		5	夏
9.	リャンカン・カンリ	7,534	東 面		伊丹 紹泰	11	春
10.	チョム・カンリ	7,048	南 稜	日本ヒマラヤ協会	関根 幸次	8	夏
11.	カバン	6,717	東 稜	日本ヒマラヤ協会	山森 欣一	6	秋
12.	トモルティ	4,888		新潟県山岳協会			新疆(天山)
13.	ユウギ・フェン	4,374	南 面	日本ヒマラヤ協会	酒井 國光	6	夏 〃 (アルタイ)

地域ニュース

《ネパール》

電気三輪車「テンポ」快調

ネパールの首都カトマンズは近年、車の排気ガスなどによる大気汚染が深刻になっているが、そんな環境悪化の中でネパール人技術者がクリーンな電気三輪車を開発、三年前の17台が今では125台に増え、さらに広まる勢いだ。

カトマンズの大気汚染源として悪評高いのは、「テンポ」と呼ばれる乗り合いタクシーだ。インド製の中古三輪車で、バタ、バタと大きな音を立てて走る。使い古した老朽車が大半なので、排気ガスは真っ黒。カトマンズ地方に約三千台といわれる。古いトラックやバスなども汚染に拍車をかけ、乾期のカトマンズ盆地には絶えずスモッグが漂い、昔よく見えた白いヒマラヤの山々も年々見えにくくなっている。

最初に電気三輪車を走らせる事業を始めたのはエンジニアのビジャヤ・マン・セルチャンさん(54)だ。「有害な石油燃料を使わずに大気汚染を解消するにはこれが一番」と考え、「ネパール電気自動車工業」という会社を仲間30人で設立。ボディはテンポのものを流用し、蓄電池とモーターを組み込んだ。

山国ネパールは、水力発電のおかげで電気は豊富。ガソリンで走る場合の約四分の一ですむという。一回充電すれば、70キロほど走れる。

排気ガスが出ず、のどや鼻も痛くならないし、振動も少ない電気乗り合いタクシーは、「サファ・テンポ(きれいなテンポ)」と命名され、クリーンカーとしてすっかり市民に親しまれるようになった。料金はテンポと同じ。

1996年、セルチャンさんが17台で始めた電気乗り合いタクシーは、今では同社だけで70台になったほか、新たに3社が加わり、4社で計125台が走っている。

電気三輪車は1台が約50万ネパールルピー(約88万円)する。だが、ネパール国立銀行は昨年か

ら電気三輪車の新規事業には7割まで資金融資する優遇策を打ち出し、後押ししている。

(3月6日付 朝日新聞)

《中国》

観光旅館を経営するダンジンさん

チベットの二番目の大都市のシガツェ市の貿易市場のそばに、新築された白い壁、五つの色彩で塗られた窓のついた、チベット風の建物がある。入口にチベット語、漢語、英語の三種の文字で「ダンジン(丹増)旅館」と書いた看板が掲げられている。これはチベット観光局の認可を得て、ダンジンさんが開いている外国人向けの私営旅館である。

67歳のダンジンさんは、シガツェ市でちょっと名の知れた金持ちである。改革・開放の初期、ダンジンさんは先駆けて個人経営の商店をつくり、だんだん金を儲け、1985年に、観光旅館を営むことを考え、15万元でもとの土・木造りの店舗をコンクリート建ての、客室30、ベッド数70の旅館に改築し、きれいな衛生設備、浴槽、新しい家具などをそろえ、1986年の春オープンした。

旅館はそれほど大きくはないが、多くの観光客を引き付けている。十年来、ここに泊まったアメリカ、イギリス、フランス、日本、オーストリアおよび香港マカオ、台湾などの20余の国と地域の観光客は延べ1万人余り、営業収入は30万余元に達し、固定資産も百余万元に増えた。経営の秘訣を尋ねると、ダンジンさんはこう語った。

「海外からチベットに来た観光客は必ずしもデラックスなホテルに泊まるわけではなく、一般の庶民生活、高原の民族風情を体験することを望む。ここは宿泊料は安く、一泊15元から50元までであり、サービスも行き届き、泊まりやすい旅館である。部屋はきれいに掃除され、お湯と茶が用意され、食事は西洋料理とチベット料理があり、値段も安い。二階のベランダには、チベット式のテントが張られ、なかにはチベット式の椅子や机が置かれ、盆栽が並べられている。ここでは、いつでもコーヒー、チンコー酒、スー油茶などチベット

の酒や飲み物がとれる。そのほか、利用客はCATVを見、国際電話をかけられる。

外国人はチベットに不案内で、いろいろ不便を感じるのは自然なことである。ダンジンさんは、外国人観光客の便宜を図るため、さまざまなサービスを提供している。例えば、観光客のために関連の手続きをとったり、荷物を運ぶ馬を買ったり、病気にかかった観光客を病院へ送ったり、貴重な物を預かったりする。ダンジンさんは、また孫に英語を勉強させるため、国外に送って留学させた。現在、この孫は帰国し、通訳とガイドをつとめ、ダンジンさんのよき助手となっている。

ダンジンさんは豊かになったが、周りの生活に困っている人のことを忘れず、よく彼らを助け、またシガツェの被害救済、希望プロジェクト（教育援助）の実施に2万5千余りを寄付した。

（北京週報 1999 No.11より）

BOOKS

山毛樗林より

昨年2月大山で遭難した高見和成氏の遺稿追悼集である。高見は我国を代表するアルパイン・クライマーである。国内の岩壁からヨーロッパ・アルプスを経てヒマラヤの多くの名峰に足跡を残した。

遺稿は、国内では唐沢岳幕岩、穂高、奥鐘山、大テタガビン、伯耆大山、遭難からの生還など。海外ではヨーロッパ・アルプスを皮切りに、共に自身は登頂できなかったエヴェレストの南北、初登頂したカンピレ・ディオールとラトックⅢ、縦走を成功させたナンダ・デヴィ、無酸素で登ったチョゴリ、そしてナムチャ・バルワである。

追悼は、海外の山ではその関係者の追悼が組み込まれている。

（山森）

B5変形判 183頁 カラー含む

問い合わせ：(有) アナヴァン ☎082-296-0996

FAX 082-296-0997 吉村 千春

クーラ(チャルン)峰-6,546m-初登頂

日本山岳会東海支部が、1997年夏にインド・ヒ

マラヤのラダック地方にある「クーラ(6,546m)」に派遣した登山隊の報告書。ツォモリリ湖周辺は、オープンされてまもない新鮮な地域である。その地域が日本隊によって精力的に登られている。本書もその一つである。

山の選定から準備・実行まで詳細に報告されている。特に計画段階で細かな「緊急対策」がたてられている。アプローチ・マーチにジープなどの車を使う場合、「車」ということで妙に安心してしまうものであるが、実際には「車」は、トラブルが多く、結果的には深夜まで行動することも多い。寒さと飢えに悩まされた経験をもつ人も多いと思う。そのような経験も生かされた「緊急対策」が取り入れられている。

ただ、咳の止まらない高齢の隊員がC2に登って酸素吸入を行った件については、その前後の詳細な報告があれば参考になる。同様なことは、ポニーに乗ってBC下で振り落とされ、重傷を負った隊員が出た件についてもいえよう。緊急対策として村にジープを待機させていたおかげでレーからデリーへと搬送でき事故者が無事生還できたのは、緊急対策の賜物であるが、少なくともそのことによって隊が、痛手を被ったのであるから、何故ポニーに乗ったのかを始めとする顛末が報告されていれば、このような中年を中心とする隊が参考になるのではないだろうか。

各方面に渡って参考になる書である。（山森）

A4判 110頁 カラー4頁 1999年3月1日刊

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8

OMCビルB1 (社) 日本山岳会東海支部

東京集会のお知らせ

日時 4月26日(月) 午後7時～
内容 最近の登山報告書
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

2000年H A J サマー・キャンプ隊員募集

3週間で登るヒマラヤ

H A Jでは、長い休暇のとれない方を対象として、成田を出発して登山を行い成田に帰着するまでの期間を「3週間程度」で済ませる登山隊を企画しています。概略は、往復に2週間、登山期間1週間程度です。当然対象山岳は「6千メートル級の山」となります。期間は、7月中旬～8月下旬の3週間です。具体的には中国、インドとなります。来年夏に休みをとれる方は早目にご連絡下さい。希望者が早く決定できれば良い企画が生まれます。負担金は60万円程度です。

チョム・カンリ (7,048m)

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期 間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:85万円
4. 〆 切 り:定員になり次第

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:85万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年	特 集
★ 1月号	雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳を登る
2月号	再発見・八ヶ岳 森の逍遙から氷瀑まで
★ 3月号	魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰
4月号	残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて
★ 5月号	新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山
6月号	南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ
★ 7月号	花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊
8月号	幽遠の黒部溪谷、岩壁、源流、高原へ
9月号	森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高
★10月号	南会津と奥美濃、山里の魅力も探る
11月号	秋深い奥秩父と西上州 その山と人
12月号	岩と雪の殿堂・剣岳と立山連峰へ

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
(東京本社) 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

9-9 チャンツェ (章子峰・Zhangzi)

* 山脈：クーンブ山群。

* 位置：ラサ (3,658m) の南西約447km。チョモランマの北約4.2km。

[28° 01' N. 86° 55' E]

* アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからは、ヤル・ツェンボ江沿いの道を256kmでシガツェ(3,836m)に至る。6時間。シガツェからユロン・ラ(4,950m)を越えて4時間でラツェ(4,080m)に着く。ここから1時間半で最高所の峠であるジャツォ・ラ(5,220m)に登る。峠から1時間45分でシガールのチェック・ポイント。ここから7km先で中尼公路から左に分かれて78kmでロンブク寺院。そこから12kmでBC(5,150m)。

* ルートの所要日数：86年日中合同隊は、4月23日BC建設後4つのキャンプを出し5月10日北東稜から16名が登頂に成功し、11日も8名が登頂した。

* 山の概念：チョモランマの北4.2kmにある。

* 通常の登山時期：春と秋

* 山名：チベット語で「チャン」は北の意。「ツェ」は峰の意。

* 小史：開放後の1982年10月14日にドイツ隊が北東稜から初登頂した。

* 参考文献：[チベット 友誼の華長存 (日中合同登山技術研修会) 1986年8月刊]

登山の概要

■主峰 (7,580m)

1982年

9月～10月 北東稜 ドイツ隊

10月14日北東稜からウトが初登頂。16日パウル、ルドルフ、ルートヴィヒ、マルティも登頂した。

[隊長：ハンスユルゲン・タウシャー、ウド・ツェートライナー、パウル・ブラウン、ル

ドルフ・フリック、ルートヴィヒ・ヘレス、マルティ・エングラール他総勢10名]

1983年

5月 北東稜 チリ隊

チョモランマに挑戦したジーノ・カザックが、5月14日C2(6,100m)から単独アタックを行い、アルパイン・スタイルで20時間で登頂した。但し、無許可登山。

1986年

4月～5月 北東稜 日中合同隊

日本と中国の合同登山隊は、4月23日ロンブク氷河末端の5,150m地点にBCを建設。東ロンブク氷河5,400m地点にリレー・キャンプ。30日チャンツェ氷河との出会い6,050m地点にABCを建設した。5月3日チャンツェ氷河最奥部の6,200m地点から北東稜上部を目指してクーロワールを直上し6,400m地点に到達。工作チームの8名は6,200mの工作キャンプに泊まる。8日大雪壁の中の6,900m地点にAC建設。10日、ACから北東稜に出て、リンチン・ピンゾー、ツェリン・ドルジ、ワンジャ、ラバ、ダー・チミ、グイサン、シャオ・チミ、レンナ、松原、宮本、古畠、山田(正)、山田(誠)、小林(之)、榛葉の16名が登頂した。翌11日にもダチョ、タシ・ツェリン、ダー・ツェリン、カイソン、ガヤ、ロゼ、ドブジャ、ジャラの8名が登頂した。

[日本側隊長：堀内利美(50) 平田恒雄(51) 松原繁(44) 宮本義彦(41) 古畠俊彦(38) 島方健次(38) 長林公夫(38) 高橋清(36) 杉山昭久(34) 山田正充(33) 石田和彦(33) 小林国弘(30) 村田健治(30) 山田誠(28) 小林之美(29) 榛葉伸男(25) 葛西登(36) 中国側隊長：成天亮(46) リンチン・ピンゾー(43) ツェリン・ドルジ(26) ダー・チミ(29) グイサン(29 f) ワンジャ(29) ガヤ(33) ドブジェ(24) ロゼ(23) ダー・ツェリン(28) ラバ(21)

カイソン(23) レンナ(20) ダチョ(23)
ジャラ(24) シャオ・チミ(22) タシ・ツェ
リン(21) 張江援(33) 許維理(33)
〔李超 トダン ツェリン・ドルジェ〕
〔チベット 友誼の華長存 (日中合同登
山研修会) 1986年8月刊〕

夏 北東稜 アメリカ

エド・ウェブスターが単独15時間で登頂。

1987年

9月 北東稜 オーストラリア

グレン・ナッシュとロッド・ターナーのペ
アが日中合同隊のルートを4日間のアルパイ
ン・スタイルで9月28日に登頂した。

1988年

7月～8月 北東稜 イタリア

イタリア隊は、7月下旬に5,100mにBC
建設。南東面を登りC3を北東稜6,900m地
点に建設した。8月9日ツェフェリーノ、フィ
リップポ、フランコ、が登頂。12日にもステファ
ノ、エルmano、ポッコラーリ、ドゥツツイ、
ソチが登頂した。

〔隊長：アルトゥーロ・ベルガマスキ、ツェ
フェリリーノ・モレスキーニ、フィリップポ・
サラ、フランコ・ヴィヴァレリ、ステファ
ノ・マッツオーリ、エルmano・ポッコラー
リ、ドゥツツイ・ロリス、ソチ・ロベルト
ら16名〕

春 北東稜 ニューゼaland

86年日中合同隊と同じルートに入ったが、
7,100mで登頂断念した。

〔隊長：ショーン・ノーマン、マイク・ベリー、
ディブ・マッサム、ゴードン・ハッセル、
バリー・ブリッジマン〕

9月 南壁 アメリカ

9月9日東ロンブク氷河6,100m地点にB
C建設。ノース・コル下6,550m地点にキャ

ンプを出し、21日バットレスの頭を越えて7,3
00m地点に到達したが悪天候で引き返した。
25日隊長が7,490mまで登ったが断念した。

〔隊長：キース・ブラウン、イヴェット・トゥー
ムズ、ダン・ラングメイド、スタン・ミシュ、
ギー・トゥームズ〕

9月 北東稜 アメリカ

13日C1(5,500m)、16日ABC(6,100m)、
19日C2(6,400m)、25日(7,000m)を建設し、
28日2名がアタックしたが、7,240mで断念。

〔隊長：ポール・プファウ、マイク・マイヤー、
ジギ・ミュールハウザー、テリー・マクニール、
ディヴィッド・トラクソン〕

1989年

6月～7月 北東稜 中国香港合同隊

チベット動乱で危ぶまれたが、6月30日に
5,154m地点にBC建設。北東稜末端の6,732
m峰に取りついた。忠実に稜線をたどり6,500
m、6,900m、7,300mとキャンプを出して、
7月24日香港の曾洛、湛易佳、呉嘉偉と中国
の王勇峰、羅申、孫維奇が登頂した。

〔中国側：王勇峰、羅申、孫維奇ら10名

香港側：チュン・キンミン(35) ツァン・
ロク(28) イブ・カミマン(35) チャム・
イックカイ(30) ロク・ワイケユン(33)
フー・チミン(40) シン・カワイ(25) チャ
ン・チオン(48) ウォン・キムリン(36)〕

1990年

4月～5月 南東稜 アメリカ隊

ポール・プファウ率いるアメリカ隊は、南
東壁から5月9日ジョン、ドン、ダグ、ジェ
リー、マイクルの5名が登頂した。

〔隊長：ポール・プファウ、ジョン・クリア
リ、ドン・マッキンタイア、ダグ・ニクス
ン、ジェリー・シスク、マイクル・シスク〕

9-10 スークァン・リ (四光峰・Sicuang Ri)

*山脈：クーンブ山群。

*位置：ラサ(3,658m)の南西約461km。チョモラ
ンマの北西約29.5km。チョー・オユーの

北北東約6.5km。

*アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で
約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。

ラサからは、ヤル・ツェンボ江沿いの道を256kmでシガツェ(3,836m)に至る。6時間。シガツェからユロン・ラ(4,950m)を越えて4時間でラツェ(4,080m)に着く。ここから1時間半で最高所の峠であるジャツォ・ラ(5,220m)に登る。峠から1時間45分でシガールのチェック・ポイント。ここから56km1時間ほどでティンリ(4,300m)に着く。中尼公路から左に分かれて車で約2時間ほどでロード・ヘッドのジャブラ(4,900m)に着く。ここからBC(5,480m)までは、ヤクで6～7時間である。

- * ルートの所要日数：1989年大阪市立大学隊は、3月20日BC建設後、3つのキャンプを出し、4月21日西稜から2名が初登頂に成功。翌22日にも4名が登頂した。
- * 山の概念：チョー・オユーの北北東6.5kmにある。
- * 通常の登山時期：春と秋
- * 山名：チベットでは「パンルンツェ」と呼ばれている。
- * 小史：1989年の大阪市立大学隊が初挑戦。
- * 参考文献：[西光峰の風 チベットの白き頂に立つ (大阪市立大学日中友好学術登山隊) 毎日新聞社 1990年7月刊 非売品]

登山の概要

- 主峰 (7,308m)
1988年

9-11 チョー・アウイ (乔烏衣・Qowoyat)

- * 山脈：クーンブ山群。
- * 位置：ラサ(3,658m)の南西約473km。チョモランマの西北西約32km。チョー・オユーの南西約5km。
[28° 04' N. 86° 37' E]
- * アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからは、ヤル・ツェンボ江沿いの道を256kmでシガツェ(3,836m)に至る。6時間。シガツェからユロン・ラ(4,950m)を越え

10月 西稜 大阪市立大学偵察隊

パロン氷河から西稜の6,000m地点まで偵察した。

[隊長：和田城志(44) 三木孝史(24)]

1989年

3月～5月 西稜 大阪市立大学隊

3月20日パロン氷河の5,480m地点にBC建設。27日5,800m地点にABC建設。4月3日内院プラトー上の西稜末端6,100m地点にC1建設。6,600mのドームを越えて6,800m地点に9日C2を建設。一次と二次のアタックは失敗。21日第三次アタック隊(奥田/三木)が南西稜とのジャンクション・ピーク(高度計7,010m)とニセ・ピークを越えて16時20分に初登頂に成功した。翌22日にも武部、八木、岡、尾形の第四次アタック隊が登頂した。

[隊長：佐藤一良(44) 廣谷光一郎(56) 福山昇二(39) 武部秀夫(36) 八木信男(33) 田中博之(32) 岡秀郎(32) 西沢裕子(32) 小倉裕史(30) 奥田尚志(29) 矢倉睦(28) 小松稔(28) 尾形達也(25) 下田勝久(27) 三木孝史(24) 「報道」田原達雄(40) 南川二郎(33) 波多間博(37) 磯沢亮祐(36) 榊原雅晴(35)]

[四光峰の風 チベットの白き頂に立つ (大阪市立大学日中友好学術登山隊) 毎日新聞社 1990年7月刊]

て4時間でラツェ(4,080m)に着く。ここから1時間半で最高所の峠であるジャツォ・ラ(5,220m)に登る。峠から1時間45分でシガールのチェック・ポイント。ここから56km1時間ほどでティンリ(4,300m)に着く。中尼公路から左に分かれて車で約2時間ほどでロード・ヘッドのジャブラ(4,900m)に着く。ここからBC(5,500m)までは、ヤクで6～7時間である。

* ルートの所要日数：1986年H A J隊は、9月21

日ジャブラ氷河の5,800m地点にBC建設。
2つのキャンプを出し、10月12日北面から
西稜を登り4名が初登頂に成功。14日にも
6名が登頂し全員登頂を実現した。

- * 山の概念：チョー・オユーの南西5kmにある。
- * 通常の登山時期：春と秋
- * 山名：ネパール側では、チョー・アウイである
がチベットでは、チョ・ウィと呼ぶ。いず
れにしても「チョ」は「神」の意である。
- * 小史：1986年のHAJ隊が初挑戦。
- * 参考文献：「喬烏衣峰 7,354m（日本ヒマラヤ
協会チョー・アウイ登山隊）1987年7月刊

登山の概要

■主峰（7,354m）
1986年

9月～10月 西稜 HAJ隊

9月21日ジャブラ氷河の5,800m地点にBC建設。北面からルート伸ばし、24日氷河上6,100m地点にC1建設。10月2日西稜6,700m地点にC2を建設した。11日の第一次アタック隊（遠藤、志小田、松木、江村）は、頂稜の7,200m地点でビバークとなり、翌12日12時59分初登頂に成功した。14日第二次隊（八嶋、小野寺、佐藤、石川、高橋、大久保）の6名はC2から9時間44分で登頂した。
[隊長：八嶋寛(37) 小野寺光義(41) 佐藤修(38) 遠藤幸寿(33) 松木克雄(31) 江村克志(30) 石川啓二(30) 高橋敏雄(28) 志小田美弘(28) 大久保主計(28)]
[喬烏衣峰 7,354m（日本ヒマラヤ協会
チョー・アウイ登山隊）1987年7月刊]

9-12 ラプチェ・カン（拉布及康・Labuche Kang）

- * 山脈：ロールワリン三群。
- * 位置：ラサ(3,658m)の西南西約493km。シシャパンマの東約48.4km。チョー・オユーの北西約40km。
[28° 18' N. 86° 20' E]
- * アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからは、ヤル・ツァンボ江沿いの道を256kmでシガツェ(3,836m)に至る。6時間。シガツェからユロン・ラ(4,950m)を越えて4時間でラツェ(4,080m)に着く。ここから1時間半で最高所の峠であるジャツォ・ラ(5,220m)に登る。峠から1時間45分でシガールのチェック・ポイント。ここから56km1時間ほどでティンリ(4,342m)に着く。ティンリから15kmほど先で中尼公路から左に分かれてランゴロ(4,500m)が車の終点でここがBCとなる。しかし、実質的なBCはここから21km先、徒歩約8時間でツォランマと呼ばれる湖の下である。(5,300m)
- * ルートの所要日数：1987年HAJとチベットの合同登山隊は、9月16日ランゴロにBCを

建設し、ABCも含めて4つのキャンプを出して、西稜から10月26日8名が初登頂に翌27日にも7名が登頂した。

- * 山の概念：7,367mの主峰を中心にして東にはどっしりとした山容の7,100m峰、台形状の7,094m峰、双耳峰の6,893m峰があり、西にはピラミダルな姿の7,072m峰、三つのピークを持つ6,952m峰がある。北稜は長い稜線となっており北東方向から見ると、まるで牛が横たわっているような雄大な山姿である。
- * 通常の登山時期：春と秋
- * 山名：「ラプチェ」は南西にあるゴンパの名前。「カン」は雪山の意。「峠に積まれた石」という意味の「ラプチェ」とする文献もある。イギリスの地図には「チョクシャム」とするものもある。
- * 小史：1951年、イギリスのシプトンが南面の写真を撮り「ラプチェ・カン」と呼んだ。59年に福岡大学隊も同じ場所からパノラマを撮った。
- * 参考文献：[友好の白き頂 ラプチェ・カン（日本ヒマラヤ協会）1988年4月刊]

登山の概要

■主峰 (7,367m)

1986年

9月～10月 西稜 日中合同偵察隊

H A Jとチベット登山協会の合同隊が9月9日ランゴロ村にBC建設。北面からルートを偵察。17日ツォランマ下5,300m地点にABC建設。19日氷河上5,650mにC1建設。氷河上6,200m地点まで達して西稜を偵察。

[日本側隊長：斎藤安平(33) 熊田雅史(30)
中国側隊長：成天亮(45) ラワン(42)]

[友好の白き頂 ラプチェ・カン 7,367m
拉普契干峰偵察報告(斎藤安平)「ヒマラヤ181号」1986年12月号]

1987年

9月～11月 西稜 日中合同隊

9月16日ランゴロ村にBC建設。20日ツォランマの下5,300m地点にABC建設。28日氷河上5,800m地点にC1建設。10月6日西稜下の氷河上6,150mにC2建設。14日西稜6,900m地点に到達しC3予定地とする。18日～20日悪天のためABCへ下山。26日C3を出発した第一次アタック隊(出口、古川、須藤、田辺、ワンジャ、ジャラ、ダチョ、ラジ)の8名が、西稜から13時50分初登頂に成功した。翌27日にも第二次アタック隊(小川、橋本、高橋、ラバ、プー、アカプー、トンルー)の7名も登頂に成功した。なお、この悪天時には、チョモランマ～シシャバンマー帯に里型の大雪が降り、異常降雪といわれた。

[日本側隊長：山森欣一(43) 出口當(45)
小川貞夫(40) 森山安次(38) 古川英勝(36) 須藤圭一(35) 橋本康弘(34) 田辺治(26) 高橋俊也(26) 中国側隊長：成天亮(47) ワンジャ(30) アカプー(25) ジャラ(24) ダチョ(24) ラバ(23) プー(23) トンルー(25f) ラジ(17f)]

[友好の白い頂 ラプチェ・カン 7,367m
(日本ヒマラヤ協会) 1988年4月刊
ラプチェ・カン初登頂「ヒマラヤ194号」
1988年1月号 15人のサミッター(山森欣

一)「山と溪谷630号」1988年1月号]

■II峰 (7,072m) 主峰の西側

1992年

イタリア隊が入山したが登頂を断念した。

1995年

4月～5月 東稜 スイス隊

4月3日ランゴロ村にBC建設。5日ABCを5,300m地点に建設。10日ツォランマの左岸から氷河に入り5,750m地点にC1を建設。20日主峰とII峰を分けるコル(6,300m)にC2を建設した。30日東稜からクリスチャン、テリー、アンドレ(ミ)の3名が初登頂に成功。5月2日にもハンス、シモン、アンドレ(グ)、ピエールの3名。5日にはドミニク、カローラ、ドリスも登頂した。

[隊長：ハンス・フグリ、クリスチャン・ミュラー、テリー・ピオンダ、アンドレ・ミュラー、シモン・ペリッタ、アンドレ・ギーザ、ピエール・ロベルト、ドミニク・グイズ、カローラ・ミルズ、ドリス・ルッチャー]

[ラプチェ・カンII初登頂「ヒマラヤ294号」]

■III峰 (7,100m) 主峰の東側

1997年

9月～10月 北面 京都府岳連隊

9月 日ランゴロ村にBC建設。北面ルートを偵察した。

[隊長：林雅樹(34) 西川大輔(21)]

1998年

9月～10月 北面 京都府岳連隊

9月12日ランゴロ村にBC建設。15日ドゥヤヌ氷河サイド・モレーン5,750m地点にC1建設。28日氷河上6,100m地点にC2建設した。アイス・フォールから雪崩発生したためこのルートを断念し、支尾根にルートを変更した。10月14日支尾根6,700m地点にC3建設。翌日アタックするも6,940mにて登頂を断念した。

[隊長：粟飯原一成(63) 林雅樹(35) 睦好正治(31) 梁瀬俊之(25) 中村友紀(21) 井上賢一(21) 西川大輔(22)]

■ 寸 感 ■

3月15日付読売新聞に、今春、日本山岳会が予定していた中国側からのガンカル・プンスムの登山を延期したとの記事が載った。理由は、ブータン側から中国政府筋に、同峰がブータン側周辺住民にとって信仰対象であることから、登山活動に対する住民の反発感情が伝えられた。1985年ブータン側から同峰に登山したH A Jに対しては、当時ブータン側からそのような住民の意向は伝えられていない。不思議なことである。(山森)

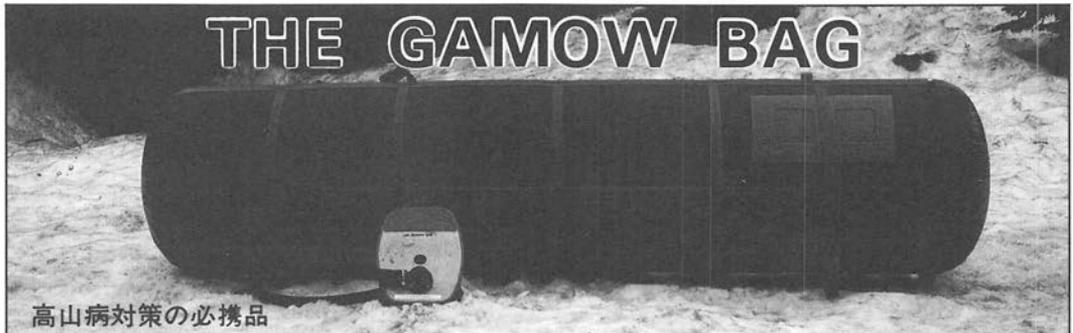
事務局日誌(3月)

- 2日(火) H A T-J テイクイン、テイクアウト改訂版協議(H A T-J、山森)
3日(水) 「事故と環境対策研修会」案内を登山隊員へ郵送(53人)
5日(金) 高橋好輝氏と「イエティ」原稿について協議(ルーム)
7日(日) 都岳連50周年記念祝賀会(山森)
9日(火) ヒマラヤ329号発送

- 10日(水) CMAから「トンシャンジャブー」の延期要請があり、受諾のF A X
11日(木) ヤンラ・カンリ登山申請書郵送
15日(月) 本年度登山隊3隊分、日山協山岳共済申込み送金
20日(土)～22日(月) チョム・カンリ隊、カバン～ナムナニ隊合宿(両隊ハケ岳)
27日(土)～28日(日) アルタイ隊合宿(安達太良山)
29日(月) 東京集会(22名)

ヒマラヤ No.330 (5月号)

平成11年4月10日印刷 11年5月1日発行
発行人 稲田定重
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 —

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高み



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟フラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004